

## 2018年12月30日降誕後第1主日説教

サムエル記上2章18—20節、26節  
コロサイの信徒への手紙 3章12—17節  
ルカによる福音書 2章41—52節

本主日は、降誕後第1主日、2025年最後の主日です。一般の年としては、2024年もあとわずか、もうすぐ新しい年が始まる、という時期ですが、教会歴は、すでにアドベントとともに新しい歩みを始めています。

わたしたちの教会の新しいことは、新しい年（降臨節第一主日）から、改定祈禱書の試用版の聖書日課、詩編を用い始めたことです。聖餐式聖書日課の指定箇所が一部変更されましたが、礼拝で用いる詩編とその翻訳が大きく変わりました。詩編は、『聖書』本文の詩編よりも、礼拝で用いている祈禱書の詩編の方が親しみやすい方も多いと思いますので、若干の混乱があるかもしれません。また詩編は、試用版となっていますので、今後、正式版において変更もあるかもしれませんが、いよいよ新しい祈禱書の使用に向けた歩みがわたしたちの教会でも始まりました。

さて、本日の聖書日課は、それまでと異なり、サムエル記となっています。その中でも、サムエルがまだ子どもであったころのお話です。また、途中省略もありますので、少し補って学びましょう。

サムエルは、その後イスラエルの祭司または指導者として活躍する、聖書の中でも良い意味で有名な登場人物です。そのような人の幼年時代として、この箇所があると言えます。しかし、別な意味もあります。

そもそもサムエルは、エルカナとハンナの子です。エルカナには二人の妻（ペニナとハンナ）がおり、ペニナには子どもがあったのですが、ハンナにはありませんでした。そのハンナが祭司エリを通して主に祈り願い、やっと生まれたのがサムエル（神は聞く）でした。そして、ハンナは、「**私はこの子をその生涯にわたって主にお委ねします。この子は主に委ねられた者です**」（サム上 1：28）と大切な子を主のために用いてくださいと祭司エリに預けるのです。つまり祭司として育ててもらうのです。本日の箇所「**サムエルはまだ子どもであったが、亜麻布のエフォドを身に着け、主に仕えていた**」（サム上 2：18）はそのことを示しています。また、「**母は彼のために小さな上着を作り、毎年、夫と共に年ごとのいけにえを献げるために上って行くとき、それを持参した**」（サム上 2：19）は、両親エルカナとハンナが、エリにあずけたといえは、サムエルをしっかりと見守っていたことを示しています。また、祭司エリもサムエルを大切に育てるというのが、本日の背景にあるお話です。

ただし、大切な子サムエルをハンナはエリに預けてしまいましたので、「**エリはエルカナとその妻を祝福し、『主に願って授かったこの子の代わりに、主があなたの妻に子どもを授けてくださいますように』**と言った。こうして彼ら

は自分の家に帰って行った」(サム上2:20)と続きます。『聖書』では、そのあと、「主がハンナを顧みられたので、ハンナは身ごもり、息子三人と娘二人を産んだ。少年サムエルは主のもとで成長した」(サム上2:21)と続くのですが、その部分は省略されています。

しかし、お話が複雑なのは、もう一つの背景があるからです。本日のすぐ前の箇所には2章12節に「エリの息子たちはいずれもならず者であり、心から主に仕えようとはしなかった」と、祭司エリ自身は、主にしっかりと使える人であったのですが、その息子、ホフネとピネハスが祭司でありながら主に仕えようとはしなかったのです。どのようなならずものであったかは、13節から17節そしてその後の22節から25節にあります。祭司でありながら主の律法に背き、いろいろと不正を行っていたようです。「ならずもの」は、ベリアルであり、のちに悪魔や墮天使の名前になります。しかし、そのようなひどい息子で悩んでいた祭司エリが大切にしたい子、預かっていた子、サムエルは、「一方、少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった」(サム上2:26)と、そしてのちに大きな祭司となったと『聖書』は告げているのです。

もう一人の妻には子どもがいるが、自分も妻であるのに子どもがいない、そのこと悩むハンナ、誠実な祭司でありながら自分の二人の息子は、祭司でありながら主に仕えようとしなないという悩みを抱える祭司エリ、そのようないろいろと複雑な家庭、成長環境で育てられながらも、サムエルはしっかりと成長した。まとめて言えばそういうことになりますが、本日の箇所が示していることは、「主に仕えること」の大切さです。

18節に、「(サムエルが)主に仕えていた」とありますが、こちらの言葉の意味は、文字通り、何か大切なものに対して「仕える」ことです。つまり、世話をしたり、役に立つようなことをしたりする行動面で仕えることです。本日の箇所ではありませんが、エリの二人の息子は「心から主に仕えようとはしなかった」とあります。この箇所の言葉は、本来は「知る」という意味です。それゆえ、新共同訳では「主を知ろうとしなかった」、口語訳では「主を恐れなかった」となっており、いわば精神面で仕えることです。サムエルは、その両方の意味で仕えていたので、立派に成長したそのことが本日の旧約日課が示している事柄だと思えます。

本日の福音書箇所は、イエス様の幼年時代を示す珍しい箇所です。そこではイエス様がしっかりと主に仕えていたことを示しているといえます。ただし、行動面で仕えすぎて両親を心配させたようです。サムエルとイエス様の子供の頃のお話が示すことは、わたしたち信仰者一人ひとり、そして教会という存在自体にも当てはまります。わたしたちも教会も、主に愛されているから、主に仕える存在なのです。当然のことですが、礼拝と『聖書』の学びから主に仕え、また教会から様々な交わりを広げることを通して、主に仕えたいと思えます。